

C-41 色彩調節について(第2報)

岐阜大教育 中野 刀子
岐阜大医 ○川口富久江

1. 第1報に引きつづき環境色と光源による実験を行った。材料は第1報と同様であるが、今回は更に温白色を加え疲労の点を追求したので報告する。

2. 材料

東芝白色けい光灯 (FL-40 S.W. ネオライン)

東芝昼光色けい光灯 (FL-40 S.D. ネオライン)

東芝温白色けい光灯 (FL-40 S.WW. ネオライン)

東芝白熱電球 (100W)

実験室を白(W)黒(B)黄緑(GY)ピンク(R)の紙で張り、照度は、4隅と中央との5カ所の平均値が500(lx)で、しかも机上が500(lx)になるよう調整する。

3. 1) 白熱電球においては、彩度が非常に高く黄味をおびる。四光源のうち最も長波長側に位置する。

2) 昼光色においては彩度が高く黄～黄緑味をおびる。四光源のうちで最も短波長側に位置する。

3) 白色においては、昼光色に比べてやや彩度が高く黄味がかかる。

4) 温白色においては、白熱電球よりやや短波長側になるが、彩度が非常に高く、白熱電球に似た傾向を示している。